

## 伊是名集落の神アシャギの集落共有空間としての役割りと空間構成について

## - 沖縄伊是名集落における空間の探究 その1 -

日大生産工(院) ○高橋 祐太  
日大生産工 篠崎 健一

## 1. はじめに

沖縄伊是名集落は、沖縄伊是名島の南端に位置する。昔からの生活や慣習、祭祀が受け継がれており、現在も伝統的な暮らしが営まれている集落である。この集落に、神アシャギという八本の短い珊瑚柱に、茅葺寄棟造りの屋根が載る祭祀空間がある。神アシャギには、祈願や奉納の踊りを行うために、集落の人びとが集う。本稿は、神アシャギと集落の人びとの生活の関係性について探究する。



図1 沖縄伊是名集落地理・伊是名神アシャギ

## 2. 神アシャギについて

## 文献

池<sup>1)</sup>によれば“このニライの神やセジを招請し、自ら神となることができたのは神女に限られたが、神アシャギとは、そのニライの神が降臨し、神女がセジを身につけ神となるための小屋であった。”“人間が農耕生活の中でつくり上げた原初的宗教的観念が、村人の求めに応じて折目節目に村落へ来訪する祖霊的性格を併有した穀霊(セジ)であったとすれば、村落にはこれを迎える祭祀施設が存在したはずである。神アシャギとはそうした祭祀施設の一形態であったと推断したい”また、仲松<sup>2)</sup>は“建物の有無とは無関係な、神を招請して祭祀を行う祭祀場である”“神への祈願、感謝、そして神と村人のアマへ、即ち歓会、共食する場所ということが出来る。”と記述している。

## 伊是名島の現状

現在、伊是名島にノロ(女性神職者)はいない。神アシャギでは、島の神人(かみんちゅ)と各字の区長、そしてサンナアンマと呼ばれる、各集落から選ばれた女性が集まり、穀物の豊穰祈願や厄払いをする祭祀が行われている。集落の豊年祭で行われるムラガーイや入羽(イ

リファー)の際、集落の人が神アシャギの前で歌い踊る。

## 3. 研究方法

神アシャギに関する情報を現地で集める。

- 1) 実測を行い、神アシャギとその周辺環境を図面に描き起こし、神アシャギの建築的情報を記録する。
- 2) 神アシャギで行われている現行祭祀の様子を記録する。神アシャギの空間構成や使い方を体験し、筆者の身体的な経験を記録した。
- 3) 神アシャギの様子を知る集落の人びとから、集落生活の中での神アシャギに関する語りを集める。文字起こしをし、語りデータとして抽出した。

## 4. 調査結果

## 実測調査

伊是名島は五つの集落で構成され、そのうち、古くからの集落である諸見、仲田、伊是名、勢理客にそれぞれ一つずつ神アシャギがある。内花は、昭和19年に行政字として諸見から分離したため神アシャギはない。

伊是名集落の神アシャギは、一辺約4,000mmの正方形の茅葺寄棟造の建物である。軒先は660mmと低く、切り出された八本のサンゴ石によって屋根が支えられている。最高高さは約3,000mmである。屋敷囲いの北側と東側には、10,000mmを超える高さのフクギが生い茂り、神アシャギの東側には、ガジュマルがある。かつて、神アシャギの敷地内には民家(屋号ソーザヤー)があったが取り壊されている。現在は、コンクリート祭祀小屋と神アシャギが残っている。

## 祭祀

神アシャギで現在行われている祭祀は、

- ・ウマチー
- ・ナー口(ナークチ)
- ・東取イ(チカドゥイ)
- ・柴差し(シバサシ)

On the rules and space composition of village sharing space of the religious facility called “Kami Asyagi”

- Exploring special schema though spatial experiences in Izena Village, 1 -  
Yuta TAKAHASHI, Kenichi SHINOZAKI

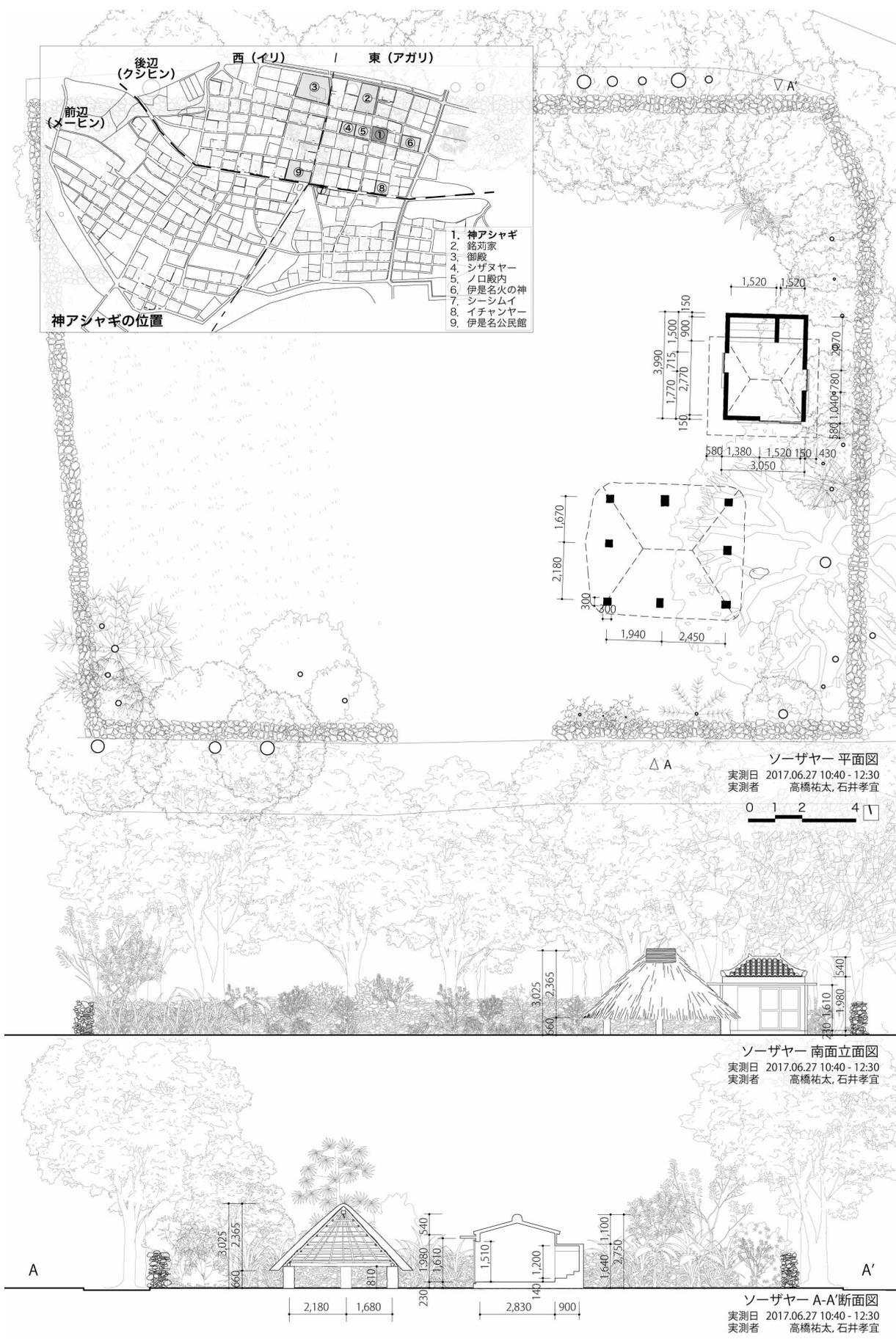


図 2 伊是名神アシャギ 図面

の四つである。ウマチーは旧暦の二，三，五，六月に行われる※1。

この祭祀の中で，五月ウマチー，六月ウマチー，ナー口，束取イ，柴差しは筆者が現地で体験し，記録をとった。神アシャギにおける五月ウマチーの様子を図に示す。(図3)

### 五月ウマチー

- ・ウートート（拌み）は，アシャギの隣にあるコンクリートの小屋で行う。コンクリート小屋内では，東側の香炉に対して，供物（お米，青鯛の酢味噌和え，揚げ物，酒，お茶）を置き，ウートートが行われる。

- ・小屋の南側には，ブルーシートが敷かれ，ウートートの間，神人以外が待機する。祭祀に使う道具や神アシャギで食べるための食事が置かれている。

- ・神アシャギには，南西角のサンゴ柱の間から，手と膝をつき屈んで入る。物を出し入れするときも，必ずここから出し入れをする。

- ・神アシャギの中では中心に男性の神人，その東側に女性の神人が二名座り，ウートートをす

る。神人の補佐はその南側に座り，筆者らは，一番出入りに近い南西角に座る。

- ・アシャギの八本ある柱のうち，北側の真ん中にある柱にお供え物を置きウートートをする。

- ・神アシャギ内では，内部にいる人全員に，供物と同じものとお茶が配られ食事をする。

### 語り

集落の人びとから収集した，神アシャギに関する語りのボイスデータを文字に起こした。語りは，人びととの会話の中から得られたものであり，昔の集落生活の様子や祭祀など，神アシャギに関係しない語りも多く含まれている。その中で，神アシャギに関する語りを抽出した。

(図4)

かつて集落はノロが中心となって集落の拌みや祭りなどを行っていた。[B-5] ノロとサンナアンマが，神アシャギの中で拌みや遊びをするときの食事として，集落内の各家庭から食料を集めていた。[A-6, C-2] サンナアンマはノロの使いであり，集落内の班から選出されていた。[C-1] 食料が貴重な時代であるにもかかわらず，各家庭では，行事がある度に，朝早起き

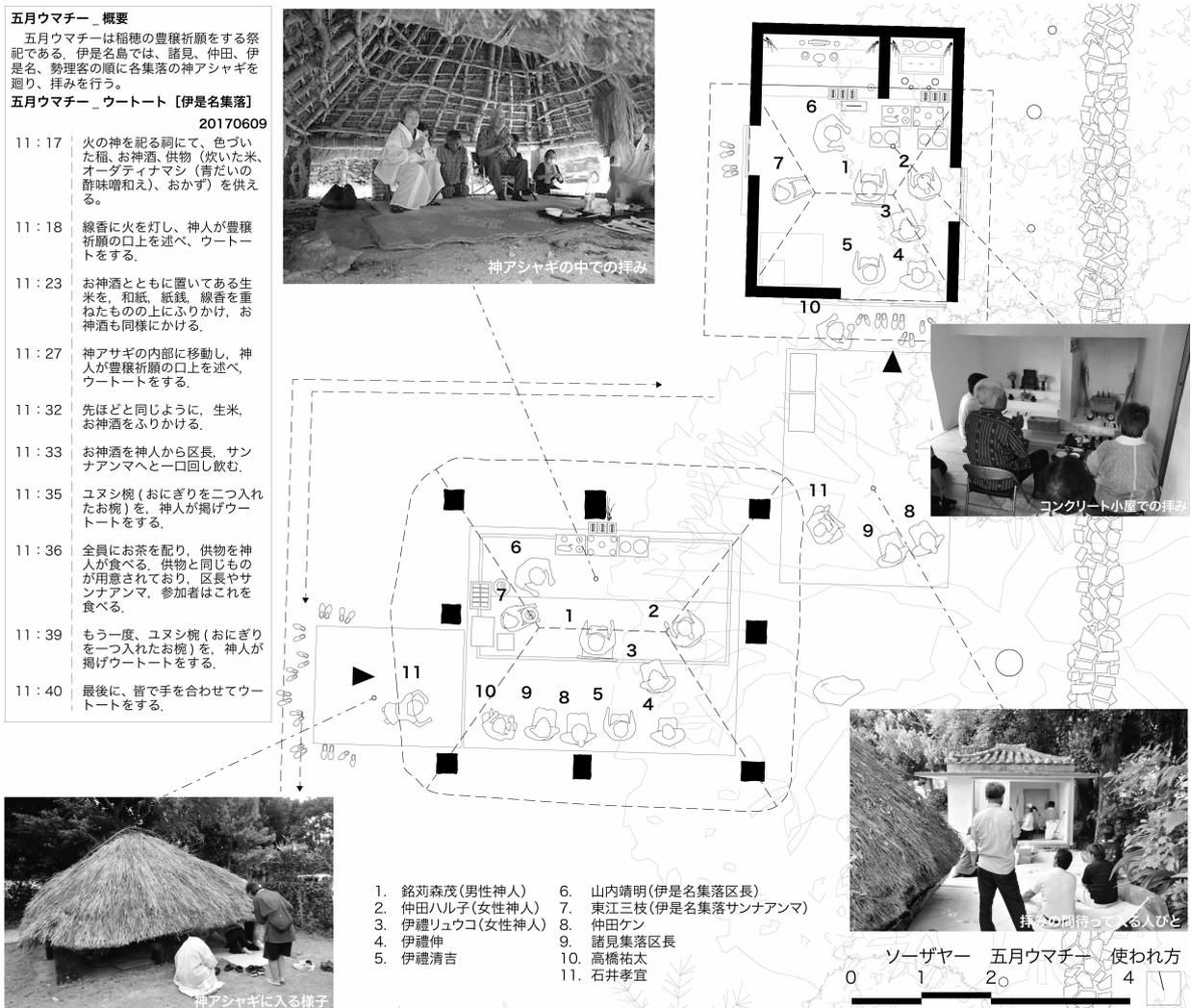


図3 五月ウマチーにおける神アシャギの使われ方

し米三合と野菜を用意して神アシャギに持って行った。[C-2, C-3] 神アシャギには、このようにして集落中から食料が集まっていた。ノロがご馳走を食べて、ウートートをやる。このご馳走は、集落の人々には分け与えることはなかった。[A-3, C-2] 人びとが一生懸命、農作業などをしている中、ノロはこのご馳走を食べていたため、人びとにこの様子をなるべく見せないようにするために、屋根がこのように低くつくられている。[A-6]

また、神アシャギが会議室であるという語りを得た。神アシャギに莫産を敷き、そこでノロが、綱引きや豊年祭の打ち合わせをしていた。内容を聞かれない話し合いもあった。[A-1, A-2, A-4, C-2] この会議の内容を人びとに聞かれないようにするために、そして、会議をしているノロの顔が見えないようにするために屋根が低くつくられている、という語りも得た。[A-2, A-4]

拝みは関係者しか行うことができななかったため、集落の人びとはあまり見に来ることはなかった。[A-6] 人びとの神アシャギに対する認識は、神様にウートートをやる神々しい場所であった。子供達は、銘苅家や御殿のような格式のある民家で遊んでいたにもかかわらず、神アシャギでは遊ばず、大人からは入ってはいけないと教えられていた。[B-1, B-2, B-3, B-4]

## まとめ

神アシャギの実測調査と現行祭祀の記録、そして人びとの語りから、神アシャギについての情報を収集し、まとめた。

## 参考文献

- 1) 池浩三、祭儀の空間、相模書房、(1979) pp. 14-27
- 2) 仲松弥秀、古層の村、沖縄タイムス社、(1977) p. 57
- 3) 伊従勉、琉球祭祀空間の研究、中央公論美術出版、(2005)
- 4) 津波高志 他、伊是名村史 下巻(島の民族と生活)、伊是名村、(1989)
- 5) 仲田清栄、伊平屋列島文化史、台北市、(1974)

## 注釈

※1 二月ウマチーは麦穂の豊穰祈願、三月ウマチーは麦穂の豊穰感謝、五月ウマチーは稲穂の豊穰祈願、六月ウマチーは稲穂の豊穰感謝をする祭祀である。伊是名島では、諸見、仲田、伊是名、勢理客の順に各集落の神アシャギを廻り、拝みを行う。

## 謝辞

本研究は、沖縄伊是名村役場、伊是名村教育委員会とともに、東京工業大学藤井晴行研究室・日本大学生産工学部篠崎研究室共同主催の建築空間図式を探求する研究会が、官学共同で行う集落調査である。本研究の一部は科研費(挑戦的萌芽研究・15K12295)を受けている。関係者に謝意を表す。

### 神アシャギ語り [A]

(170927\_仲田美代)

・伊是名は単なる行事の一つおりの、シヌグとか、よっての打ち合わせとか、組み合わせとかのそういった会議。会議ってあるさーね、会議をそこで、諸見は諸見で、伊是名は伊是名で、祭り、綱引きとか豊年祭、そういったの(打ち合わせ)はそこでしよった。今度はどうするとかそう行った話だと思ふよ。[1]  
 ・アサギは会議室。アサギは会議室だよ。莫産敷いてそこに、こうして(頭を下げて屈んで)入りよったよ。秘密会議もするんじゃないの。政治とか役職の人たちが集まるんだから、この混じりの会議。多分そうと思ふよ。今からしたら役場の職員と一緒に。だからこんなしてこのうち(神アシャギ)は、人も入らないように、ここでする会議外から漏れて聞かれたら困るってそれでこう(屋根が低くなっている)。[2]

(170927\_平田茂さん)

・あれの下で何か、昔は隠れてなにかご馳走を自分たちで食べて、人には食べさせないようなことをするわけだ。中に入って、中に入って、ウートートして、ご馳走を食べる。[3]

(170927\_安里浩亀)

・あれ(神アシャギ)はね、昔のノロが会合するところだったらしい。ノロといつて、かみんちゅ。かみんちゅは皆女だったらしい。色々協議するとき、顔が見えないように、かみんちゅが集まって協議するところだったらしいから、いろいろな。[4]

(171003\_末吉正巳)

・あれ(神アシャギ)はもう祭祀場。そのなんていうの、アシャギはもともと女性が中に入って神事をやるところ。ノロの、だから、祈りのあれとかが見えないようにして(屋根が低くなっている)。[5]

(171006\_山内靖明)

・(神アシャギの屋根は)昔の人の思惑があるみたい。あれは、ノロだとかこっちの地頭だとかこっちを納めていた侍とか、そういう人たちがおがみしてご馳走食べたりしてるから、一般の人たち毎日食うか、食わずからの、一生懸命仕事しているときにそういうあれやっているから、できるだけ下とかさういうのが出ないように、そういうあれだったみたい。(一般の人が見にくくすることは)あんまりなかったと思う、関係者しかやれないから。人は、朝から晩まで汗水流して仕事してるのに、こっちで遊んでいるようなもんだから、そういうあれも考えてから。[6]

・あれ(アシャギの敷地内にあるコンクリートヤ)がだから神様をお祀りしているところ、このアシャギというのは、こっちは、あのこれを、このご馳走をこっちを持って行って、こっち(神アシャギ)でみんなでご馳走を食べたりして、なんか会話して遊んだりしてという場所なわけさ。[7]

### 神アシャギ語り [B]

(170927\_仲田美代)

・(神アシャギで)遊んだことはないね、神々しいもの、向こうらへんには神々しくて入れなかったよ。神さまのヤーだからほれ、簡単には入れなかった。ヌンドゥルチとシザヌヤーも、あの一、銘苅家と御殿は自分たち親戚でもあったから、よくそこで遊んだだけさ。銘苅家も、これは神様とかじゃなくて、宗家のあれだから。[1]

(170927\_平田松江、平田茂)

・(神アシャギ以外の人)中に入らん、入らん。中に入らなかつたね。ウートートするだけ。今は人もいなくなつたから(みなくなつたから?)みんなオープン。(部落の人が神アシャギの中に入ることは)滅多にないね。[2]

・誰もみんな入らんよ。神様のみなさんがこうやって入るわけだから。普段の皆さんは入らんよ。[3]

・神様と思っているから。普通の人は神様大変と思っているから。(子供のときもアシャギでは遊ばなかつた?)ううん。向こうに入らないよってみんなから言われるから、入らんさーね。[4]

(171006\_山内靖明)

・このノロさんが地域をまとめて、拝みごとだとか、祭りごとだとかそれで人をまとめているのは、ノロたちも一緒に地域を守っていたわけさね。昔は、一般のひとはなかなか簡単に入れなかつたと思う。ノロだとか、島の神様を拝んだり、地域を仕切っていた人たちがやっていたはず、一般の人が簡単に入れるところじゃなかつたわけよ。[5]

### 神アシャギ語り [C]

(170927\_仲田美代)

・サンナアンマという、あれ(ノロ)の使いという人がいたわけよ。これは各地域から出て、伊是名では1班から16班までこの行事には誰、どこの班が出るという。[1]

・今が月に一回の字費といつて払ってるけども、あれはこの、月にある行事のたんに米3合ずつとかまた野菜、神様たちが集まるお昼作ったり、サンナアンマとソーザとかアサギにしようたの昔は、村の人が今めんどくさくなってお金で精算して、各家庭月千円になった。昔は、米三合にまた野菜、なんでもネギならネギ一束など、持って行きよったよ。その日に使ってくださいと言って、あれたちの昼食。[2]

・(ノロの方以外で部落の方はアシャギに)いかないかない。朝早く起きて、このお米3合と野菜を持って行って、向こうの下に置いて来てさ、各家庭は自分のうちですからさ、部落の班長さんが行くんじゃない。[3]

(171003\_末吉正巳)

・アサギでノロたちが、神女たちが、神になんていうのそういう豊作を祈願するとか、そういう風な村々の災厄、それからいろいろなものをこうそこで、一年の神事で、一年で三回か四回そういった折りを捧げる。神事ごとがあるわけさ。これはみんなノロと区長とか昔からやってきているから、その神事には区長もついていかなければならないから、外で見守りはするけど中には入らない。女性のそういった神職とかそういうのがいなくなって、それでもそういった神事は続けていかななくてはならなくて、区長がやらざるを得なくなった。[4]

図 4 神アシャギに関する語り